

グローバル人はつらいよ！ーアフリカ編ー

第1章：ザンビア Part1

私は今アフリカのザンビアという国にいます。埼玉の多くの方には、馴染みのない国名ではないでしょうか。ひょっとしたら、東京オリンピック閉会式の日に独立し、開会式と閉会式で国名が違っていたということで、ご存知の方がいるかもしれません。私はここで独立行政法人国際協力機構(JICA)の企画調査員として、JICAが行なう国際協力ボランティア事業の実施運営に携わっています。青年海外協力隊については、名前を聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。この協力隊事業はJICAボランティア事業の一つで、今年で始まって50周年を迎えます。これから皆さんに協力隊やJICAボランティア事業について、アフリカについて、その実情を知っていただければと思い、綴っていきたいと思います。

そもそも私のアフリカとの係わりは、20年以上前にさかのぼります。他人の役に立つ仕事をしたいと思い、しかし漠然とした目標しかなく、大学に入りなんとなく教師になろうと思っていたころ、湾岸戦争が起こりました。毎日テレビで流される映像は、とても現実感がなく、当時はまっていたテレビゲームワンシーンにしか見えませんでした。パソコンも携帯電話もない時代です。海外旅行もしたことがなかった私は、海外で起きていることも実際に知らないのに人に教えることができるのだろうか、(これまた漠然と)とっていました。友人から「青年海外協力隊」という海外協力ボランティアがあることを知り、(これまたなんとなく)応募し、大学卒業と同時に参加することとなりました。

「困っている人の役に立つことができる」という大きな期待と「社会人経験もなく、英語がほとんど話せない自分に何ができるのだろう」という小さな不安を抱えて、派遣国であるアフリカ・ザンビアに到着しました。赤茶色の大地にわずかに木が生えるところにぽつんと滑走路があり、そこに降り立ったとき、一気に不安が広がったことを覚えています、「私はここで生活できるのか」と。首都のルサカで1か月の現



どこまでいっても大地と空しかありません

地訓練を行ないませんが、日々、持っていた期待が不安に塗り替えられていきました。ザンビア国政府に表敬訪問を行ない、教育大臣とお会いしたとき、彼の話した英語が全く理解できなかったときの不安は相当なものでした。それでも首都に滞在している間は、一緒に赴任した仲間との共同生活で、毎日日本語を話し、不安を紛らわすこともできました。

活動場所は、首都から東に500キロほど行ったところにあるチャサ中等学校でした。住居は、学校敷地内にある教員住宅の一棟を私のために用意（私が着任する半年前まで配属されていた前任ボランティアが使用していたものでした）してありました。ザンビアに到着して1か月が過ぎ、この学校が用意してくれた住居に入った瞬間から、自分の選択を後悔し、日本に帰国したいと思い始めました。



ザンビアの一般的な中等学校

この場所は、学校を中心とした集落であり、生活物資は4キロほど離れた幹線道路沿いにある集落に行かないと手に入れることはできません。しかも大して大きくもないこの集落では、必要最低限のものしか手に入らず、着任した頃は、乾期の真っ最中で、玉ねぎとトマトくらいのものでした。首都で買ったお米と玉ねぎ炒めを毎日食べていました。サツマイモの時期は毎日3食サツマイモを食べていた気がします。2日

に一度買い出しで歩く往復8キロの道のりは、村人に好奇の目で見られ（半径50キロに外国人がいなければ当然ですが…）苦痛以外の何物でもなく、そういったことも日本へ帰りたい気持ちに拍車をかけていきました。

学校では、教員も生徒も大変歓迎してくれていました。私が受け持った8年生（日本の中学2年生程度）では、教員が足りずしばらく授業が行われていなかったこともあり、その知識欲は大変大きかったです。私の拙い英語を理解しようと必死に聞き取り、黒板を書き取り、放課後私の家まで質問をしてきました。しかし当時の私は、それすらうっとうしく感じていました。大学を卒業したばかりの私にとって（私だけなのかもしれませんが）、言葉も違う異国の地で子どもたちに理科を教えるということは、精神的にも肉体的にも厳しいもので（精神的に弱かったということもありますが…）、日々自分の殻に閉じこもり、日本語が話すことのできる知り合いがいる首都と任地を頻繁に往復し、ただただ時間が過ぎるのを待っていた日々が続きました。

そんな私でも、学校の教員や生徒たちは、大変ありがたいことに受け入れてくれて、（根気よく？）接してくれていました。気持ちが切り替わったのは、ザンビアに来て1年くらい経った時だと思います。なぜだか急に周りの人が話す英語が聞き取れるようになり、（残念ながら話す方は相変わらず成長していませんでしたが）、授業のトピックも一通り経験し、進め方のコツもわかってきた時、気持ちがずっと楽になりました。ここにいてもいいかなと思うようになりました。一人の教員として授業を行ない、クラス担任をもち、夜の見回りを行ない（全寮制の学校のため、学期中生徒は敷地内に住んでいる）ました。ザンビアの学校では珍しい音楽祭や学校間対抗の体育大会なども主催しました。生徒たちと過ごすことが大変楽しく感じるようになりました。

残り任期は、あっという間に過ぎてしまいました。あれほど長く感じた任期の2年間は、終了間際にはものすごく短く感じられました。帰国してしばらくして、今度はなぜ自分は何もせず帰ってきたのだろう、とそんなことを思うようになりました。アフリカの子どもたちのために、何かしらの能力を身につけ再びあの場所に帰ろうと、思い始めました。



ザンビアの子どもたち